

らまぶつた  
ramaputaを師として尋ねた。

アーラーラ・カーラマにある信仰、無所有処「われを知る」「われを見る」「所有がない」「自分を属するものがない」禅定の心は私にもあるが、アーラーラ・カーラマは、ただ信ずるだけであるか。

信・精進心・臆念・等持(三昧)・慧の五根は自分にもある。(仏性)捨離に、離貪、滅に、寂靜に、証智に、正覺に、涅槃にむかつて転進していかない。そこで私の私は、その法に満足できないで、その法から厭い離れた。(聖求経・自燈明法燈明) けつして師を批判しているのではない。師がもっていることを私も、誰でももっている仏性としてとらえている。しかし、禅定でとまれないものがある。それは無上の安穩涅槃を証明することであった。

日本の釈尊、聖徳太子の法華経義疏安楽行品の中で、常好坐禅について、聖徳太子の考えが示された。

法華経には顛倒分別、諸法有無、是実非実、在於閑処、修撰其心、安住不動、如須弥山、とある。

これに対して、法華経義疏卷4安楽行品第13、51行の解釈は

釋此(中)文、本義配上長行作重解釋。而私意少不安故、但直頌不作重也。但

從「顛倒分別」以下二行偈、頌上「常好坐禅」初一句明好禅之由、次一句正頌上「常好坐禅」言由有顛倒分別心故、捨此就彼

山間常好坐(禅)。然則何暇弘通此經於世(間)。故知、「常好坐禅」猶「心」入不

「親近境。本義云、「此」三行非頌常好坐禅」從「顛倒分別」以下五行偈、皆頌上不親近実法有、「顛倒分別」一行、但拳非顯是。

つづいて聖徳太子は坐禅のことは別の意見を持っていた。

而私意少不安故、但直頌不作重也。

常好坐禅を頌(ほめ)ているが、解釈の部分では本義の釈とは相違する。言うところは、顛倒分別の心あるによるが故に、

此の(家族・社会・国家)を捨てて、彼の山(林)の間にゆいて、常に坐禅を好むということになる。もし然ればすなわち何の暇ありてか、此の(一大乗の)経を世間に弘通することができようか。故に知る、「常好坐禅」は、なお不親近の境に入れねばならぬということ。

すなわち社会や国家を忘れず、大法の弘通を目的とする者は、山間僻地に身を避けて、常好坐禅に専念してはならぬ、と聖徳太子自身の御言葉で述べている。

親鸞聖人の兄弟子、聖覚もまた、唯信鈔(聖典P99)で、行住座臥をえらばず、時処諸縁をきらわず、とのべている。

次の師、ウツダカ・ラーマブッタの非想非非想の境地は、スッタニパータのアッタ力篇のうち釈尊の教として解かれているのを見出し得る。(中村元「ゴータマブッタP76」)

『いかに行じた者にとつて、形態が消滅するのですか。楽と苦とはいかにして消滅するのですか』

釈尊『かくのごとく行じた者の形態は消滅する。けだし世界のひろがりの意識は想いを縁として起こるからである』(同P79)

すべての識のありさまvinñāṇaṅkaraṇīyaṃ。無所有anānāsaṅkaの成立する所以は、すな

わち「歡喜randiは束縛である」(同P80)「内面的にも外面的にも、感覺的感受を喜ばない人、このようによく気をつけ

て行っている人の識は止滅するのである」「苦しみは識に縁つて起こるのである」

「つねによく気をつけ、自己に執する見解をうち破つて、世界を空sunyaなりと觀せよ」(同P82)「ここに実に明知者vedagāhi

る。ここに実に一切に打ち勝つた者がいる」(同P83)修行僧はどうして一切に打ち勝つた者であるか。

修行僧の愛執は断せられていて……一切に打ち勝つた者。見習いの修行僧、チュンダに対する説法の中で、釈尊の言葉としてラーマの子、ウツダカはこのような言葉を語った。「見つつ、見ず」と。何を見つつ、見ないのであるか。よく磨かれた剃刀の面を見るけれども、その刃を見ないのである。

(同P84)劣つて卑しく、凡夫のことであつて、聖に非ず、意義のないことで、剃刀のこのみ考えていふのである。しかし、「見つつ、見ず」といふことを正しく語る人が語るならば、「見つつ、見ず」といふことを正しく語るべきである。

「かくのごとく一切の相が具わり、一切の相を圓滿し、滅なく増なく善く説かれ純粹圓滿なる清淨行brahmacariyaが明らかにされた。後の化迦旃延経(舎衛國・中を以て法を説く)で語られた。

日本の親鸞は、聖典P508 愚亮善信作久遠劫よりこの世まで あわれみましますしるしには 仏智不思議につけしめて善悪淨穢もなかりけり

見真大師の初めの名は善信、後に親鸞と改む淨穢(さとりと迷い、善と悪、浄土と穢土)聖徳太子 十七奈憲法10条

われ必ずしも聖ならず、必ずしも愚ならず、ともにこれ凡夫

有無の見(インド哲学史P127)

仏陀は「他人は有ると無いとの両極端に立脚している。しかし如来は有り無しを離れて、中をもつて法を説く」

十七奈憲法の解釈 第10条(中央公論社「聖徳太子」P414)

心の中で恨みに思つた。目に角を立てて怒るな。他人が自分にさからつたからとて激怒せぬようにせよ。人にはそれぞれ思うところがあり、その心は自分のことを正しいと考える執着がある。他人が正しいと考えることを自分はまちがっていると考え、自分が正しいと考えることは他人がまちがっていると考え。しかし自分が必ずしも聖人なのではなく、また他人が必ずしも愚者なのでもない。両方とも凡夫にすぎないのである。正しいとか、まちがっているとかいう道理を、どうして定められようか。お互いに賢者であつたり愚者であつたりすることは、ちょうどみみがね(鑼)のどこが始めでどこが終わりだか、端のないようなものである。それゆえに、他人が自分に対して怒ることがあつても、むしろ自分に過失がなかつたかどうかを反省せよ。また自分の考えが道理にあつていないと思つても、多くの人々の意見を尊重して同じように行動せよ。

釈尊は師の教えを受けたが、満足しないで前正覺山へ行き、苦行を修する。それから苦行を捨てて五比丘と別れて、スジャータの捧げる乳粥を食し、菩提樹の下に座る。

合掌